

# 楊洲周延（ようしゅう・ちかのぶ）「日本名女咄（めいじょばなし） 春日局 竹千代」

ホーム

文学研究科の「新機軸」案と新センター構想

新センターのコンセプト

新センターが担うべき機能

多彩な研究拠点の構築を目指して

研究科プロジェクトの推進

新センター構想実現に向けて

KEY WORD集

講演本

プロジェクト概要

講演本について

吉沢コレクションの世界

〈吉沢コレクション〉受入れと整備の報告  
—搬出・搬入作業の過程

古文書

プロジェクト概要

杉本図書館所蔵「近世史資料」の主な古文書

大判錦絵二枚続揃物の内、明治27年（1894）



解題：

楊洲周延（1838-1912）は幕末から明治期に活躍した浮世絵師。幕末浮世絵最大の派閥であった歌川派の総帥・三代歌川豊国（1786-1865）に入門し、豊国没後はその弟子である豊原国周（1835-1900）に教えを受けた。画名「周延」は国周の「周」を貰ったもの。一方、越後国高田藩に籍を持つ武士として戊辰戦争に参戦しており、浮世絵師としての活動は、慶応年間（1865-68）に錦絵作品などが知られるものの、概ね明治10年（1877）以降のこととなる。

明治の役者絵を代表する絵師である師・国周とは対照的に、たおやかな女性像を得意とした。代表作には新時代明治の「美人」を描きとめた「真美人」（大判錦絵36枚揃、目録2図、明治30、31年〔1897,98〕）や江戸時代には決して描かれることがなかった江戸城内をテーマにした「千代田之大奥」（大判錦絵三枚続揃物、107枚、明治27～29年）「千代田之御表」（同、115枚、明治30年）などが知られる。

「日本名女咄」は歴史上の賢女たちを取り上げた二枚続による錦絵シリーズで、他に「武田勝頼室北の方」「桂小五郎 芸者竹松」「木曾義仲の妾巴女」など10図以上が確認できる（刊行は明治28年までと目される）。本図は徳川幕府三代将軍家光（幼名竹千代）を育てた春日局が選ばれ、弟君国松の部屋から侵入した猫をめぐる逸話が描かれている。

〔菅原真弓〕

← 前の記事へ